

日中国交正常化 40 周年記念

服部龍二と考える

日中 これまでの 40 年、 これからの 40 年



テキスト、選書：服部龍二

2012年のことです

2 ページ目から
ブックリストです →

選書に寄せて

今年9月、国交正常化から40周年を迎えた日中関係は、戦後で最も緊迫したものとなりました。11月には中国共産党の党大会が予定されています。中国とどう向き合うのかは、日常的な関心事になりつつあります。

将来への展望が見えにくいまま、歴史を振り返る意味は少なくないように思います。

ここでは近現代、とりわけ第1次世界大戦後から現在までの日中関係について、比較的最近に刊行された本を集めてみました。いずれも専門家によって執筆されたもので、中国の近現代史を知るうえでの手引き書も含めてあります。

何かのお役に立つところがあれば幸いです。

服部龍二 (はっとり りゅうじ)

1968年生まれ。京都大学法学部卒。神戸大学大学院法学研究科単位取得退学。博士(政治学)。中央大学総合政策学部教授。日本外交史・東アジア国際政治史専攻。著書に、『広田弘毅』(中公新書)、『日中歴史認識』(東京大学出版会)、『日中国交正常化』(中公新書、大佛次郎論壇賞、アジア・太平洋賞特別賞)など多数。本年5月にはNHK Eテレ「さかのほり日本史」に出演し、9月に『NHK さかのほり日本史〈外交篇〉2 昭和“外交交戦”の教訓』(NHK 出版)を上梓している。

イラスト：藤村まり子

岡本隆司・吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』(東京大学出版会、2012年)

近代中国に関する入門書です。社会史、法制史、経済史、外交史、政治史、文学史、思想史に各章が当てられています。

久保亨編『中国経済史入門』(東京大学出版会、2012年)

中国経済史の入門書です。編者による総論以下、「第1部 アウトラインと研究案内」「第2部 史料紹介」「第3部 統計史料」から成っています。

久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士『現代中国の歴史——兩岸三地 100年のあゆみ』(東京大学出版会、2008年)

中華民国の成立から現在に至るまでを平易に論じています。図版や註釈も豊富です。

西村成雄・国分良成『叢書 中国の問題群 1 党と国家——政治体制の軌跡』(岩波書店、2009年)

清末から中華民国、中華人民共和国に至る20世紀の中国政治体制を跡づけています。基本書案内も有益です。

深町英夫編訳『孫文革命文集』(岩波文庫、2011年)

1924年に神戸で行われた著名な演説「大アジア主義」のほか、大隈重信や田中義一、犬養毅に当てた書簡などが収録されています。

澁谷由里『馬賊で見る「満洲」』(講談社、2004年)

張作霖に象徴される馬賊に着目しながら、清末から1920年代までをたどっています。近代日本とかかわりの深かった満州ですが、張作霖＝日本の傀儡という単純な理解とは一線を画し、奉天省の財政改革や日本人軍事顧問なども論じています。

小池聖一『満州事変と対中国政策』(吉川弘文館、2003年)

小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変——1918～1932』(ミネルヴァ書房、2010年)

佐藤元英『増補改訂新版 昭和初期対中国政策の研究——田中内閣の対滿蔵政策』(原書房、2009年)

鹿錫俊『中国国民政府の対日政策 1931-1933』(東京大学出版会、2001年)

満州事変前後について、比較的最近の専門書を挙げてみました。いずれも丹念に史料を追いながら、日本と中国の対外政策を内在的に分析しています。

山室信一『キメラ——満洲国の肖像』(中公新書、1993年、増補版 2004年)

満州国をギリシャ神話の怪物キメラにたとえて論じた著作です。キメラの頭は獅子、胴が羊、尾が龍で、獅子は関東軍、羊は天皇制国家、龍は中国皇帝と近代中国になぞらえられます。

内田尚孝『華北事変の研究——塘沽停戦協定と華北危機下の日中関係 1932～1935年』(汲古書院、2006年)

光田剛『中国国民政府期の華北政治——1928-37年』(御茶の水書房、2007年)

日中戦争前には、華北分離工作が進められていました。その時代の日中関係や華北政治を分析した研究です。

秦郁彦『盧溝橋事件の研究』(東京大学出版会、1996年)

安井三吉『盧溝橋事件』(研文出版、1993年)日中戦争の発端となった盧溝橋事件を論じたものです。前者は第一発を探求し、第29軍の中国兵による偶発的射撃と解しています。後者は第一発について結論を留保し、二等兵の行方不明を重視します。

臼井勝美『新版 日中戦争』(中公新書、2000年)

日中外交史の大家による著作の1つです。満州事変後から日中戦争、太平洋戦争の時代を俯瞰できます。

戸部良一『日本陸軍と中国』(講談社、1999年)日本陸軍における「支那通」と呼ばれた軍人に焦点を当てた労作です。日中戦争を考える

うえで、日本陸軍の動向は避けて通れないでしょう。中国通の陸軍軍人が、日中提携を目指したはずでありながら、なぜそれとかけ離れてしまったのかを考えさせてくれます。

姫田光義・山田辰雄編『日中戦争の国際共同研究 1 中国の地域政権と日本の統治』（慶應義塾大学出版会、2006年）

波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の国際共同研究 2 日中戦争の軍事的展開』（慶應義塾大学出版会、2006年）

エズラ＝ヴォーゲル・平野賢一郎編『日中戦争の国際共同研究 3 日中戦争期中国の社会と文化』（慶應義塾大学出版会、2010年）

西村成雄・石島紀之・田嶋信雄編『日中戦争の国際共同研究 4 国際関係のなかの日中戦争』（慶應義塾大学出版会、2011年）

日米中台による国際共同研究の成果です。各国から大勢の研究者が参加され、政治、軍事、社会、国際関係など多角的に日中戦争を論じています。

川島真・清水麗・松田康博・楊永明『日台関係史 1945-2008』（東京大学出版会、2009年）
戦後日台関係の通史です。日中関係を考えるうえで必携で、とても参考になります。

陳肇斌『戦後日本の中国政策——1950年代東アジア国際政治史の文脈』（東京大学出版会、2000年）

「二つの中国」という概念を軸にしながら、吉田茂内閣、鳩山一郎内閣、岸信介内閣の対中政策を分析しています。

添谷秀編著『現代中国外交の六十年——変化と持続』（慶應義塾大学出版会、2011年）
現代中国外交に関する論文集です。中国における「戦争責任二分論」、歴史教育、抗日戦争史観の転換、「経済外交」、対外開放路線、シンクタンク、台湾問題、国連PKOなどが扱われています。

石井明・朱建栄・添谷秀・林晓光編『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』（岩波書店、2003年）

1970年代の日中関係について、基本となる史料と証言を集めています。

李思民『日中平和友好条約交渉の政治過程』（御茶の水書房、2005年）

若月秀和『全方位外交』の時代——冷戦変容期の日本とアジア・1971～80年』（日本経済評論社、2006年）

日中平和友好条約など1970年代を論じた本です。専門書でありながら読みやすく、情報公開請求やインタビューを駆使しています。

岡部達味『日中関係の過去と将来——誤解を超えて』（岩波現代文庫、2006年）

中国外交研究の第一人者による現代日中関係論です。「日中関係は感情的に見るべきではなく、利害関係から判断すべき問題である」という書き出しに始まります。毛沢東発言が日中誤解の起点ともなったことから、対日新思考、日中関係の打開に至るまでを論じています。平易で示唆的な内容です。

アレン・S. ホワイティング／岡部達味訳『中国人の日本観』（岩波現代文庫、2000年）

アメリカの研究者が、歴史教科書問題、反日学生デモ、経済関係などを通じて、中国の対日認識を描いた本です。文献のみならず、中国人や日本人にインタビューを重ねていることも特徴となっています。

益尾知佐子『中国政治外交の転換点——改革開放と「独立自主の対外政策」』（東京大学出版会、2010年）

毛沢東時代には、主要敵たるソ連を封じ込めようとする「一本の線」戦略がありました。鄧小平時代になると改革開放路線が導入されるとともに、「一本の線」から「独立自主の対外政策」へと転換します。その過程について、中越戦争、国際共産主義運動の断念などを含めて検討しています。

加茂具樹・飯田将史・神保謙編著『中国改革開放への転換——「1978年」を越えて』（慶應義塾大学出版会、2011年）

現代中国研究で知られる小島朋之先生の追悼

論文集です。日中関係のみならず、台湾や米中関係を対象とした論考が多く含まれています。

清水美和「中国問題」の内幕（ちくま新書、2008年）

東京新聞論説委員だった著者による作品です。2007年の温家宝来日、対日新思考、戦略的互惠関係などを扱い、中国共産党支配の内実に迫ろうとしています。

家近亮子・松田康博・段瑞聡「岐路に立つ日中関係——過去との対話・未来への模索」（晃洋書房、2007年）

テーマ別に執筆されています。「過去との対話」として、歴史認識、靖国神社参拝、教科書問題、日本の戦後賠償、中国の愛国主義教育を取り上げ、未来への展望を模索します。

毛里和子編・園田茂人編「中国問題——キーワードで読み解く」（東京大学出版会、2012年）

中国の将来を見すえながら、中国共産党、社会、人民解放軍、海洋主権、対外援助、中国モデル、歴史観、台頭中国をどう捉えるかなどを分かりやすく論じています。天児慧「日中関係」は中国における路線対立をという見方を示し、今後の日中関係には「対立のシナリオ」「【日本孤立化】のシナリオ」「共存共栄のシナリオ」があるものの、最善の「共存共栄のシナリオ」を探りにくい「脆弱な基本構造」にあると説きます。

黒沢文貴・イアン＝ニッシュ編「歴史と和解」（東京大学出版会、2011年）

歴史認識に関する国際共同研究です。ヨーロッパなど諸外国の事例が豊富で、歴史和解において研究者が果たす役割についてもヒントを与えてくれます。日中関係では、日中歴史共同研究などについて章が割かれています。

劉傑・川島真編「1945年の歴史認識——（終戦）をめぐる日中対話の試み」（東京大学出版会、2009年）

劉傑・三谷博・楊大慶編「国境を越える歴史

認識——日中対話の試み」（東京大学出版会、2006年）

日中間における歴史認識についての共同研究です。前者は終戦前後に焦点を絞り、留学生、引揚、技術者留用、中国残留日本人などを扱います。後者は19世紀後半から戦後を広く対象としながら、満州国、歴史教科書、台湾、慰霊、歴史対話と史料研究など個別テーマを掘り下げます。

川島真・服部龍二編「東アジア国際政治史」（名古屋大学出版会、2007年）

日中関係史という枠を越えて、国際政治史の全体像を俯瞰しようとした通史です。近現代史の全般について、「伝統的」国際秩序から冷戦後のグローバル化時代までをコンパクトに論じています。各時代を象徴するようなコラムが、50近く盛り込まれています。

高原明生・服部龍二編「日中関係史 1972-2012 I 政治」（東京大学出版会、2012年）

服部健治・丸川知雄編「日中関係史 1972-2012 II 経済」（東京大学出版会、2012年）

園田茂人編「日中関係史 1972-2012 III 社会・文化」（東京大学出版会、2012年）

現代日中関係史について、数年間かけて行われた共同研究の成果です。60人以上の執筆者が各方面から分析されています。

服部龍二「日中歴史認識——「田中上奏文」をめぐる相剋 1927-2010」（東京大学出版会、2010年）

「田中上奏文」を軸に日中間の歴史認識を跡づけたものです。「田中上奏文」とは、田中義一首相が昭和初期に天皇に上奏したとされる怪文書です。

なお、『朝日新聞』2012年9月16日「ニュースの本棚 日中国交回復40年」で触れた本は除きました。「ニュースの本棚 日中国交回復40年」につきましては、下記をご参照下さい。
<http://book.asahi.com/reviews/column/2012091600007.html>

東京大学出版会

<http://www.utp.or.jp/>